

2025. 4. 13 (日) ルカ23:50~56

23:50 さて、ここにヨセフという人がいたが、議員の一人で、善良で正しい人であった。

23:51 ユダヤ人の町アリマタヤの出身で、神の国を待ち望んでいた彼は、議員たちの計画や行動には同意していなかった。

23:52 この人がピラトのところに行って、イエスのからだの下げ渡しを願い出た。

23:53 彼はからだを降ろして亜麻布で包み、まだだれも葬られていない、岩に掘った墓に納めた。

23:54 この日は備え日で、安息日が始まろうとしていた。

23:55 イエスとともにガリラヤから来ていた女たちは、ヨセフの後について行き、墓と、イエスのからだを納められる様子を見届けた。

23:56 それから、戻って香料と香油を用意した。そして安息日には、戒めにしたがって休んだ。

#### <説教>

ただいま朗読された聖書には、十字架の上で死なれたイエスのからだに墓に納められたことが記されています。神はイエスのからだを墓に納めるために、ヨセフという人(50)をお用いになり、また、イエスのからだに確かに墓に納められたことを目撃証人として、ガリラヤから来ていた女たち(55)をお用いになりました。

まず、ヨセフについてです(50-53)。彼は〈議員の一人で、善良で正しい人であった〉(50)。〈議員〉とは、イエスを神冒涇のという死罪に定め、ピラトにローマ帝国への反逆罪で訴えたユダヤ最高法院(22:23)の議員のことです。そして〈善良で正しい人〉とルカは記します。善意の人、良識と品位のある人、律法を厳格に守っている人だったということでしょう。〈ユダヤ人の町アリマタヤ〉は、エルサレムの北西40kmほどの町だったと考えられています。〈神の国を待ち望んでいた〉彼は、先の〈善良で正しい人〉とも大いに関係していると思いますが、旧約聖書の教える信仰に則り神を信じ、律法を守っていた敬虔なユダヤ人でした。なお、「ヨハネの福音書」では〈イエスの弟子であったが、ユダヤ人を恐れてそれを隠していた〉(ヨハネ 19:38)人と記されています。長く待ち望んでいた神の国がついにナザレのイエスによって到来したという信仰がないわけではなかった、だからイエスの弟子になるにはなった、しかしまだ確固たる信仰には至っていなかった、心では信じていたが口で告白し行動で表すという「信仰告白的態度」が弱かったということでしょう。それでもさすがにイエスを嫉み憎み、殺そうと計画し、イエスを神冒涇者故に死刑に当たると決めつけ、ピラトに訴えようという他の議員たちの計画や行動には同意できませんでした。おそらくそのときの最高法院の議決は棄権したか、初めから議会には欠席したのではないかと考えられています。

〈この人がピラトのところに行って、イエスのからだの下げ渡しを願い出〉(23:52)しました。当時のローマの慣習だと、十字架で死刑にされた人はそのまま野ざらしにされて自然に朽ち果てるにまかせることになっていたようですが、さすがに敬虔なユダヤ人にはそれはできませんでした。また、イエスが息を引き取られたのは午後三時過ぎでした(ルカ 23:44-46)から日没、すなわち次の日になるまではあと三時間くらいしかありませんでした。

た。ことは急を要していました。なぜなら、〈ある人に死刑に当たる罪過があつて処刑され、あなたが彼を木にかける場合、その死体を次の日まで木に残しておいてはならない。その日のうちに必ず埋葬しなければならぬ。木にかけられた者は神にのろわれた者だからである。あなたの神、主が相続地としてあなたに与えようとしておられる土地を汚してはならない。〉(申命記 21:22-23)とあるからです。なお、このヨセフのような〈有力な議員〉(マルコ 16:43)、〈金持ち〉(マタイ 27:57)でないと、ローマ総督ピラトのところに行ってイエスのからだの下げ渡しを願い出ることはできなかったでしょう。

マルコの福音書によると、ピラトは百人隊長を読んで尋ね、イエスが死んだことを確認してからイエスの遺体をヨセフに下げ渡しました(マルコ 15:44-45)。

それで、ヨセフは〈からだを降ろして亜麻布で包み、まだだれも葬られていない、岩に掘った墓に納め)ました(ルカ 23:53)。死なれ、冷たくなったイエスのからだはヨセフの手によって支えられ、十字架から降ろされました。イエスが確かに死なれたことはヨセフによっても確認されました。亜麻布は〈きれいな亜麻布〉(マタイ 27:59)、墓はヨセフの〈新しい墓〉(同 59:60)でした。また墓の場所は、イエスが十字架につけられた場所にあった園の中でした(ヨハネ 19:41)。

こうして十字架につけられて死なれたイエスのからだを墓に納めるために神〈議員の一人〉アリマタヤのヨセフをお用いになりました。他の議員たちはイエスを殺すという〈計画や行動〉を願いどおりに果たし終え、イエスを思い切り侮辱し、低く貶めたことで満足していたことでしょう。その後のイエスの遺体がどうなろうと知ったことではなかったでしょう。先に見た申命記によってイエスのからだを十字架から降ろすことまでは考えたようですが(ヨハネ 19:31)、きちんと墓に納めることまでは考えておらず、死刑にされた犯罪人たちのための共同墓地にでも入れておくというのが精々だったろうと思います。しかし、それがイエスを殺した人間のいわば限界でした。彼らはもうそれ以上イエスに対して何もすることができませんでした。しかし神はそんな議員たちの中から一人、彼らの計画や行動に同意しない人ヨセフをおこされました。〈神の国を待ち望んでいた彼〉を、文字通り神の国(支配)のもとに置かれました。彼の善良と正しさを用い、彼がイエスに対する最大の善意と敬意をもって、自分がやがて葬られるために掘り、まだだれも葬られていない墓にイエスのからだを丁寧に納めるようになさいました。神はヨセフを選び、イエスの確かな葬りのために奉仕させなされたのです。また、ピラトもまたこのイエスのからだの埋葬のために用いられました。

〈この日は備え日で、安息日が始まろうとしてい)ました(54)。この日は金曜日で、あと三時間ほどもすれば翌日土曜日〈安息日〉になろうとしていたことは先に見ました。しかし、この日にアリマタヤのヨセフによって確かに行われた、イエスの体の墓への葬り、それが三日後のイエスのからだのよみがえりの〈備え〉となったのです。そして、そのイエスのよみがえりによって本当の私たち人間の安息が、即ち罪と死からの解放が始まろうとしていたのです。

さて、そういわけで、イエスにからだはアリマタヤのヨセフの墓に確かに納められました。その墓があった園には多分他にも同じような墓が掘られていたのでしょう。〈イエスとともにガリラヤから来ていた女たちは、ヨセフの後について行き、墓と、イエスのからだを納められる様子を見届け)ました(55)。彼女たちが考えていたように三日後に来ると

きに墓を間違えないためでした。もちろん、こうしてこの女性たちもイエスのからだは確かに墓に葬られたことを確認しました。それは大事なことでした。三日後のイエスのからだよみがえりの確かさは、このイエスのからだの埋葬の確かさが前提だからです。

このようにして、十字架で私たちの罪をその身に負われ、神の呪い、刑罰を私たちの身代わりに受けてくださり、一番悲惨な死を遂げてくださったイエスでしたが、その後、そのからだはきちんと丁寧に確かに墓に葬られました。それは十字架の苦難からよみがえりの栄光への備えとなりました。人間の〈計画や行動〉の限界のその先を神は行かれるのです。私たちの人生、そして死、その先のためにも神は備えていてくださいました。それが主イエス・キリストの十字架の死、そして復活です。私たちもやがて死に、そのからだは墓に葬られますが、イエスの再臨の時、その墓からイエスのように、神の力によってよみがえらせていただくのです。イエスが確かに死なれ、そのからだは墓に葬られたことは、私たちの救い、安息にとって無くてはならないことだったのです。